

人生のエフォート



宮田隆志

関西大学化学生命工学部
[564-8680] 吹田市山手町 3-3-35
教授, 博士 (工学).
専門は高分子ゲル, 膜, 医用高分子, 界面科学.
tmiyata@kansai-u.ac.jp
www.chemmater.kansai-u.ac.jp/sentan/

第61回高分子年次大会初日の男女共同参画セミナーへ理研の前田瑞夫先生にお誘い頂き、「弁当があるよ」の一言につられて参加した。仕事と育児・介護との両立支援に関するご講演の中で、女性が仕事を続けるかどうかの判断を迫られる時期(岐路)が結婚と出産であり、それに対する企業の取り組みを紹介された。その企業では女性が働くためのサポートが行き届いていると感じたが、少しだけ疑問も生じた。

私の家庭は双方ともにフルタイムの共働きである。結婚当初から妻が仕事を続けるかどうかは本人の希望を優先していた。妻も同様に結婚と出産の際には相当悩んだが、もう一つ、子供が小学生に上がるときも二人で悩んだ。保育園は19:30までなので妻が仕事帰りに迎えに行くことができた。ところが小学校では学童保育が17:00で終わるため、それ以降は子供が自宅で一人きりになる。妻が急いで帰っても18:30過ぎになる。当然(?)私は問題外(男女平等なので、当然ではないのだが…)。前述の講演での私の疑問がこの点で、つい手を挙げて「子供が小学生になるときも判断に迫られると思うが?」と質問してしまった。これが男女共同参画委員の目にとまり、原稿依頼につながったようだ。「弁当」が高くついた結果である。

さて、本題「仕事と私事」の「私事」部分を紹介したい。私の人生のエフォートは大学教員:夫:父親=85:5:10である。本稿執筆に当たって考えた比率である。ご覧のとおり問題は仕事以外のエフォートである。15%は低すぎる。さらに夫のエフォートが5%というのは絶望的で、いつ三行半を突きつけられても文句を言えない。一方、妻のエフォートは仕事人:妻:母親=100:100:100で、トータル100%を越えている。妻としてのエフォートが100%というのは多分に私の希望を含むが、オーバーワークは明白である。改めてエフォートの差を認識した。結婚して子供が生まれ、現在に至るまで、妻のほうで生活は大きく変化した。現在の日本では結婚や出産によって生活が一変するのは主として女性のほうであり、男性は影響が少ないように感じる。悪例の私と違って最近ではイクメンの方も多いと思うが、まだまだこれが日本の現状ではないだろうか。

最近、化学系を専攻する女子学生も増え、研究室も華やかになってきた。教育者としての責務は、役立つ社会人として学生を世に送り出すことである。教育者としては、時間をかけて指導してきたので、男女問わずに仕事を続けてほしいと思う。一方で、今の日本で働く女性には大きな決断に迫られるときがある。教育者としては可能な限り仕事を続けてほしいが、一人の人間としては各人の幸せの物差しに従って最良の道を選んでほしい。

子供が保育園のときには、妻が遅ければ私が子供を迎えに行き、妻の仕事場近くで待ち、妻が終われば交代して私が仕事に戻るなどで乗り切った。子供が小さい頃には「いつ帰ってくるの?」と尋ねられるたびに寂しい思いをさせているのではと思ったが、最近では「一人で大丈夫!」と留守のほうが快適な様子に私のほうが寂しく感じている。妻とともに右往左往しながらやりくりしていた頃が懐かしい。今も妻の予定によっては私が先に帰って子供の夕食を整えるが、その際には「子供の世話で先に帰る」と学生にありのまま言うようにしている。女子学生には家庭と仕事の両立の大変さ、男子学生には共働きの状況など、身近な共働きの例を示したいと思っている。

時々、「ダブルインカムで裕福ですね」と言われる。確かに一人よりは収入は多いが、共働きを続けるための支出も多い。また自分たちだけではなく、子供達の負担も大きい。一方で、仕事を続けることによって得ることも多い。男女問わず、仕事を続けるのがよいのか、家庭に入るのがよいのか、ライフスタイルは十人十色である。女と男、未婚と既婚。人それぞれに価値観が異なり、環境や状況に応じて判断が分かれる。いずれにしても相手の立場になって考え、家族や友人、仕事仲間と最適な人間関係を築くことが重要であろう。仕事人:夫:父親=85:5:10というエフォートで、夫および父親としては落第の私が書くべきではなかったと最後の数行になって後悔している。今日は早く帰って、100:100:100の妻を労いたい…と思いつつ、まだ仕事場で本原稿を書いている。